

終戦の和平工作と政治犯釈放のころ

——山崎早市氏*に聞く (1)

吉田 健二

はじめに

- 1 第一高等学校に学ぶ
- 2 産労へ入る
- 3 全協・日本出版のオルグ (以上、本号)
- 4 同盟通信社へ入社——終戦工作に従事
- 5 政治犯の釈放のころ

はじめに

1945 (昭和20) 年10月1日午後2時、AFP通信 (フランス通信社) 極東特派員のロベール・ギラン (Robert Guillain) 記者が、同僚のJ.マルキユース記者と、記者仲間で、米『ニューズウィーク』誌の東京特派員ハロルド・R.アイザック記者を誘って、東京・府中刑務所を訪れ、政治犯として同所内の東京予防拘禁所に収容されていた徳田球一・志賀義雄ら日本共産党の幹部を取材した。

ギラン記者ら3人の府中刑務所の訪問は、日本共産党の幹部がアジア・太平洋戦争の終結をへてもなお獄中に在った事実を明らかにし、翌10月2日AFP通信やAP通信を通じて世界に打電された。

ギラン記者らのスクープは、GHQ (連合国軍総司令部) に衝撃を与えた。1週間前 (1945年9月26日) に、哲学者三木清 (法政大学教授) が豊多摩刑務所 (東京・中野) で獄死したことにつづくニュースだったからである。GHQは急きょ1945年10月4日、日本政府に対して「政治的・市民的・宗教的自由に対する制限撤廃に関する覚書」を發して、治安維持法など一切の人権抑圧法規の撤廃や10月10日まで政治犯全員を釈放するよう指令した。

*山崎早市 (やまざき・そういち) 略歴

1908 (明治41) 年神奈川県に生まれた。1927 (昭和2) 年4月、第一高等学校文科甲類に入学した。在学中、社研 (社会科学研究会) に加入して、有賀新、米原昶、大島慶一郎や、1学年後輩の戸田慎太郎らとマルクス主義の理論と思想を学んだ。1930年3月、卒業試験3日目に治安維持法違反の容疑で逮捕され、除籍となった。

第一高等学校を除籍となったのち、産労 (産業労働調査所) で無給書記として研究を重ねた。また1933 (昭和8) 年6月以降、全協・日本出版労組のオルグとなった。この間、共青 (日本共産主義青年同盟) に加入し、また日本共産党の三・ニテーゼの策定に伴い、全協指導部の主流派が新行動綱領に「君主制の打倒」を盛り込むことに反対した。

この府中刑務所の訪問に関しては、ギラン自身、のちに「徳球を釈放させたのは私だ——府中刑務所での劇的冒険」(『文藝春秋』1955年10月号)においてこれを紹介した。

ところで、徳田球一・志賀義雄ら日本共産党の幹部が府中刑務所になお拘禁されている事実を、直接ギラン記者に伝えたのは、藤原春雄を通じて情報を得ていた同盟通信社の山崎早市記者であった。本稿は、ギラン記者のスクープ記事を中心に、おもに同盟通信社を通じて活躍した山崎早市記者の証言をまとめたものである。

本証言は、1991年5月31日、同7月11日、神奈川県藤沢市城南4丁目4番地15号の山崎早市氏の自宅で吉田健二が聴取し、宮川好伸氏(元時事通信社記者、現時事通信社社友会事務局長)の協力を得てまとめたものである。

なお、政治犯の釈放に関して、編者は1989年6月4日と7月4日、渡部富哉氏の協力を得て、徳田球一の側近で、日本共産党の幹部だった椎野悦朗氏からもヒアリングをおこなった。編者は、この椎野証言に関しても「政治犯の釈放と日本共産党の労働運動方針」と題してまとめ、当研究所の研究叢書『産別会議の誕生』(総合労働研究所、1996年)に収めた。興味ある方は合わせてお読み頂きたい。

(吉田健二)

1937年7月以降、全協・全日本印刷出版労組の東京支部のメンバー中、柴田隆一郎や白石光雄らを指導して印刷工の親睦団体「和工会」や、これを母体にした「出版工クラブ」の設立を指導した。1937年12月15日に人民戦線事件で検挙された。1938年に釈放されたのち、実家の機械工場を経営した。

1941(昭和16)年9月30日、同盟通信社に記者として入社し経済局内国經濟部に所属した。1943年に編集局(文部省担当)に異動となった。1945年4月以降、同盟通信社において安達鶴太郎や海野稔らを中心とする鈴木貫太郎内閣への終戦の和平工作の働きかけ工作に協力した。

1945年8月15日、天皇の「終戦の詔勅」を新橋の第一ホテルで聞いた。同年9月下旬、ロベール・ギラン記者に、徳田球一・志賀義雄ら日本共産党の幹部が府中刑務所内の東京予防拘禁所に収容されている事実を紹介した。ギラン記者ら3人は10月1日、府中刑務所を訪ねて取材し、これが世界に打電され、GHQは1945年10月4日に政治犯の釈放を指令した。

1945年10月31日、同盟通信社は共同、時事両通信社へ分割され、時事通信社に移籍し、引きつづき經濟部に所属した。同年11月、浅川謙次らの協力を得て労農記者会を設立して代表幹事に就任し、高揚する占領期の日本社会運動を報道・解説した。

朝鮮戦争下の1950年7月28日、レッドパージにより時事通信社から解雇された。1992(平成4)年6月29日死去した。享年81歳。著作に、デュルケム著・山崎早市訳『社会分業論』(春秋社、1940年)、『機械工業の基礎知識』(同盟通信社、1942年)、編者『生産増強の方策』(霞ヶ関書房、1943年)、『農民解放の方向』(同盟通信社、1946年)、などがある。

1 第一高等学校に学ぶ

証言記録の目的

—— 山崎さんには体調がすぐれないとのこと、無理に証言をお願いしまして恐縮に存じます。この機会を逃したら政治犯釈放の取り組みや経緯がきちんと記録されず、埋もれてしまうのではないかと思います、勇気を出してお願いの手紙を差し上げた次第です。

山崎 丁寧な手紙を有難う。私の話が役に立てばうれしいです。あなたからの手紙読んでいて昔のことが思い出され、懐かしさや、友誼・交遊を重ねた友人の顔が浮かんできて胸が苦しいくらいだった。

有賀新も、学年が一つ下の木内誉治（戸田慎太郎）も鬼籍に入った。私らの同期で、共に検挙され、のちに渡満して『満洲評論』の編集長をした佐藤大四郎もずっと昔、太平洋戦争が始まった年に関東軍憲兵隊に検挙され、奉天の刑務所で獄死した。佐藤はスポーツマンで、第一高等学校のボート部のコックスだった。佐藤は勉学に、スポーツに、また社研の活動において米原昶とともにリーダーとして活躍した。

有賀は米原昶と大変仲が良かったのですよ。米原は10年前（1982年5月31日）に死去した。

手紙にありました大島慶一郎君は健在らしい。何年前かに大島君から電話があって、診察ができないということで診療所（埼玉県入間郡大井町）を閉じたということだった。みんな精一杯頑張りました。

—— 私は現在、戦時抵抗に関する事例研究として、有賀新さんや戸田慎太郎さんらが機械工の友社を母体に試みた抵抗活動の掘り起こしを進めています。この件に関してもお聞きしたく存じます。

山崎 わかりました。休憩をとりながら話す

ことにしましょう。私はこの間、事前の準備として「質問書」の項目ごとにメモをとっておりました。久しぶりに勉強しました。もし私の記憶がはっきりしないときは、のちに確認して電話か手紙で答えることにしましょう。

—— よろしくお願ひいたします。

山崎 川添君（川添隆行）にも会うそうですね。彼は茅ヶ崎市の中海岸に住んでいて、私の家から近い距離ですが、もう何年も会っていない。先日、この機会に「略年譜」をつくらうと思ひ、時事通信社時代の活動について確認するため川添君に電話をかけた。相変わらずでしたね。彼はいつも突っ張っていて、電話をかけたときも「人生はこれからだ。頑張ろう」（笑）と話をしていた。

—— 川添隆行さんは新聞単一（日本新聞通信放送労働組合）の2代目の委員長をされていますね。

山崎 何代目か知らないが、川添君は1947年の2・1ゼネストの研究など、占領期の日本労働運動史を研究するさい逸してならない人物ですね。実は川添君も私も時事通信社のレッドパーヅ組なのです。朝鮮戦争が勃発した翌月、1950年7月28日に突然16名に解雇の辞令が出て会社を追い出された。

あなたが同盟通信社時代の長島（又男）先輩や、編集局長だった松本重治さんに関して調べているとは知らなかった。松本さんは、同盟通信では古野伊之助社長に次ぐポストにあって、私にとっては雲の上の人だった。長島先輩の名前を聞いて私はとても懐かしい。

最初の検挙

—— 山崎さんは第一高等学校を卒業され、そのまま全協・日本出版のオルグになられたのですか。

山崎 違いますね。私は1930（昭和5）年3

月、卒業試験の3日目に神楽坂署の刑事に構内で検挙された。

私は神奈川県で生まれたけれども、東京の牛込榎町（現在は新宿区）の家で過ごした。毘沙門天善国寺をへて神楽坂を下ればお堀端に出て、省電の飯田橋駅だった。

神楽坂署は私をねらっていたのですね。卒業試験の3日目に、刑事が、試験が終わるのを教室の窓越しに監視して待っていた。刑事が遠慮なく構内に入って検挙するようになったのは、私が検挙された1930年からで、以前は正門を出た道端が活動中の現場だった。

私は必要な単位を得ていたが卒業は認められなかった。第一高等学校—東京帝大をへて官僚ないし財閥企業へという栄達のコースを志望していたわけではないが、人生プランは崩れた。

検挙はやはり衝撃でしたね。当時、東京帝大は思想問題を起こした学生に厳しく対処していて、勾留者や検挙の経歴をもつ学生の入学を認めなかった。私が入学した年か前年に、第一高等学校においても思想問題に対する監視・指導が強められ、岡田恒輔という生徒主事が文部省より異動してきた。

高等学校時代、私は学外の非合法的な団体と接触しないことにしていた。これには、有賀や米原の配慮があったと思いますね。けれども少しの期間、米原昶から頼まれて3・15事件や4・16事件の検挙者の救援活動を手伝った。

社研のメンバー中、有賀新や米原昶らは共青に入っていたことがバレて放校処分となった。2人は北海道に逃げて、米原は小樽市の鉄工所に機械工として勤めて身を隠した。米原は2、3年して、有賀はもっと早くに東京へ戻って来た。私が有賀と全協・日本出版のオルグとなったのはこの後のことです。

—— 「放校処分」とはどういうことですか。退学処分のことですか。

山崎 除籍して学校から追い出し、また卒業を認めないことです。要するに学校から放逐し、かつ復学を認めない処分のことですね。岡田恒輔生徒主事のもとで罰則が強化された。これ以上ない厳罰で、もう大学に進学するには文部省の専検にパスするか、他の高等学校に編入して卒業するほかなかった。

社研で学ぶ

—— 木内誉治さん、伊藤律さんも社研のメンバーだったそうですね。

山崎 木内はメンバーでも学年が一つ下だった。また私は高等学校のとき伊藤律に会っていない。彼は私が卒業したのと入れ替りに入学したのです。

伊藤律という秀才が社研に入ってきたということは、私が釈放されて、自宅で静養していたとき大島慶一郎からの連絡で知った。勾留中、私は刑事から暴行を受けたのです。大島君は私より1年遅れて卒業したが、私らが出た後、第一高等学校の社研は、大島君が頑張って活動をつづけていた。あなたは大島君に会ったそうですね。

—— ええ。1月（1991年1月21日）にお会いしました。ぜひ研究を完成させてくれ、と激励されました。

山崎 大島君は卒業したのち、プロ科の書記や、黒田善治（別名・青山和夫）、川内唯彦、永田広志らと日本戦闘的無神論者同盟（「戦無」）の活動をしていました。大島君は理科甲類で、医学部への進学をめざしていたが、マルクス主義の研究にのめり込んでいた。

—— 大島慶一郎さんは「戦無」の活動で検挙され、有賀新さんの提言で医師の道を決意して千葉医大へ進学、卒業後は名大の医局に入ってなお共青の活動をつづけたそうです。

山崎 その通りです。名大の医局にいたとき

は学会や出張を名目に東京に出て来て、私らと連絡をしていた。

話を先に戻します。社研のメンバー中、高等学校時代の伊藤律を一番知っているのは大島君ですよ。社研で伊藤律を指導したのは大島君です。巷では長谷川浩が伊藤を指導して共青に入れたという話があるようだが、これは事実と違う。伊藤律が検挙され、高等学校を放校となって以降もしばらくは大島君と接触していた。大島が千葉医大に進んだのちに、伊藤は長谷川浩と接触をもったのです。

社研で読んだ文献

—— 山崎さんは高等学校時代、社研の活動で明け暮れていたのですか。

山崎 そんなことはない。猛勉強ではないが、寮の同室の連中が「まじめ組」で1、2学年は勉強に専念した。とくに語学——英と仏語の勉強に時間を割いていた。どの科目も出席することが基本で、かつ真面目に勉強しなければ単位は取れなかった。社研の活動に明け暮れたわけではない。

—— 社研ではどんな文献を読みましたか。

山崎 私は生意気にも「社会とは何ぞや」とか「貧富の差は何によって生じその解決の方策は何ぞ」といった具合に、何でも背伸びして読みました。記憶に残っているのは、幸徳秋水『社会主義真髓』（1903年）、河上肇『貧乏物語』（1917年）、山川均『社会主義者の社会観』（1919年）、同『資本主義のからくり』（1922年）などです。

当時、第一高等学校の社研の場合は班をつくって、各班でチューターを立てて学習会をもっていた。各班をまとめる代表者、つまり社研の責任者は私のときは米原昶だった。

エンゲルス著『空想より科学へ』（1880年）や、マルクス・エンゲルス著『共産党宣言』

（1848年）などは、前者はフランス語版で、後者はドイツ語版で読みました。もちろん日本語版でも読みました。なぜ両方を読んだのか——、それは厳密に解釈することのほか、原典と対照することにより自らの語学力を高めるためでもあった。

これらの社会主義文献は、私が入学した当初、本郷界隈の古本屋の棚や軒先に堂々と置いてあったのですよ。ところが2年生のときに3・15事件（1928年）、3年生のときに4・16事件（1929年）があつて以来、社会主義に関する文献が店の棚に並ぶことはなかった。ほんとうに「ある日突然」に棚から消えてしまった。ただし店主にさりげなく読みたいと言えば奥から出してくれた。

デュルケームの研究をめざす

山崎 私は将来的に研究者をめざしていた。そして、大学へ進学できない事態のなかで私が考えたのは、進歩・左翼の陣営に立つ在野の研究機関、たとえば産労（産業労働調査所）やプロ科（プロレタリア科学研究所）に籍をおいて研究することだった。あの時期、思想問題や学生運動で大学へ進学できなくなった連中は、産労やプロ科に憧れたのですよ。産労もプロ科も左翼のメッカのような感じでしたね。

—— 山崎さんは何の研究をめざしていたのですか。

山崎 私は社会学を研究したかった。もちろんマルクス主義の思想や理論にも興味があった。けれども学問対象としてはフランス社会学であり、社会の構造分析や統合機能に関心をもっていた。社会を多様で重層の構造として、あるいは関係性を重視した分析をしたかった。私は、大学へ進んだらエミール・デュルケーム（Emile Durkheim）を研究しようと決めていました。

結局、私は大学へ進学できなかったが少しの期間、産労へ出入り、またプロ科の先輩後輩と付き合うなかで研究者になったような感覚になった。私は全協・日本出版のオルグになって、デュルケームの研究をこつこつづけていましたね。

—— 山崎さんはデュルケームについて、何か論文を発表していますか。

山崎 論文は書いていないが翻訳書があります。デュルケームの代表作の一つに『社会分業論』（1893年）がありますね。原書は当時、翻訳されていなかった。私はこれを翻訳して、春秋社の「世界大思想全集」というシリーズに入れてもらい、1937年5月に上・下2分冊で出版しました。

—— 知りませんでした。

山崎 社会学それ自体、新しい学問で、当時は分岐していなかった。その社会学にあってもドイツ社会学が優位にあった当時、デュルケームの翻訳は日中戦争の最中という時勢で注目されることはなかったが、私個人としては満足だった。翻訳中、私は学問研究の喜びに満たされました。

2 産労へ入る

産労の機関誌を購読

山崎 とにかく私はアカデミックな職場を望んだ。私は高等学校時代に、産労が「国際社会政治経済情報」誌と銘打って発行していた月刊の雑誌『インタナショナル』（1927年7月～1933年7月）と、もう一つの機関誌『産業労働時報』（1929年6月～1933年5月）を購読していました。

社研のメンバーは産労の2つの雑誌や、在学中に創刊をみた『第二無産者新聞』（1929年9月9日～1932年3月31日）を購読するのが半ば

義務となっていて、事情があって購読できない場合は属する班ごとに回覧で読むことになっていた。高等学校で、この産労の『インタナショナル』と『産業労働時報』を配布していたのが有賀新だった。

私は有賀のもとで1、2か月ほど『第二無産者新聞』の配布を手伝った。新橋の本社に用事があって出向いたら、あとでわかったのですが編集長として岡部隆司さんがいました。ところが産労の仕事を手伝うことになり日比谷の事務所へ行ったら岡部さんがいて、何か不思議な感じで挨拶したことがあります。私が産労に入って何か月もしないうちに岡部さんは来なくなりましたね。

産労へ入る

私は釈放後、自宅でしばらく静養したのち1930年12月に産労に入り『インタナショナル』の編集を手伝うようになりました。編集といっても高山洋吉さんや井汲卓一さんの指示で海外文献や、遅れて届く新聞記事などの翻訳が主なものだった。私の語学力は産労で培われたのだと思いますね。

産労は、私が高等学校の3年生のとき1929年に野呂栄太郎の尽力で再建された。メンバーは高山洋吉、村田陽一、風早八十二、今野良蔵、井汲卓一さんらが中心であったと思う。岡部隆司さんは間もなく検挙されたと思います。岡部さんは労働者出身でしたが、じかに接する機会があり、信念の強靱さや心の広さのみならず、知性の深さを感じましたね。

—— 山崎さんはどなたの紹介で産労に入られたのですか。

山崎 安達鶴太郎です。第一高等学校のときの社研の先輩に、東京帝大の経済学部に進んだ安達がいました。彼は「鶴ちゃん」と呼ばれて後輩から尊敬され、帝大に進んだ先輩からは頼

られていた。安達はどういうわけか今野良蔵さんと面識があり、私は安達先輩から今野さんを紹介され、彼の推薦を得て産労に書記として入りました。

安達は丹後のちりめん問屋の息子で、宮津中学（京都府立）を卒業して第一高等学校に入学した。安達も左翼学生で、大学時代は産労やプロ科に出入りしていたという。

—— 長島又男さんによれば、安達鶴太郎さんは大学時代、日本共産党系の新聞『無産者新聞』（1925年9月20日～1929年8月20日）の編集を手伝っていたそうです。

山崎 当時はみんながそうなのですよ。編集委員といたって手当が出るわけでない。私もそうです。私は下訳をしても翻訳料をもらっていない。

1929（昭和4）年に4・16事件が起きました。安達も危なくなってきた、身を隠す必要があった。安達は1931年3月に東京帝大を卒業すると、家業を継ぐからとウソを言って実家から資金を出してもらいドイツに留学した。安達はベルリン大学とフランクフルト大学で哲学を学んだそうです。1934年春に帰国して、同盟通信に入社した。私も7年遅れて1941年9月に同盟に入社して安達に再会するのです。

—— 産労ではどのような研究をされましたか。

山崎 私は産労に所員として入ったのではない。研究会には出させてもらったけれども、テーマを与えられて研究したとか、何かの企画に関係したということはないのです。

私は当時21、2歳くらいで、帝大を出ていないし何の実績もない。もっぱら翻訳の下訳で、調査・研究の補助員として手伝ったが、手当といたって交通費や食事代を貰った程度だった。産労が編集した『日本資本主義発達史講座』が1万部も売れて、岩波書店から何パーセント

か印税が入った。けれども印税が入ったからといって「金一封」の袋が出たわけでない。

「発達史講座」のねらい

山崎 1932（昭和7）年5月、野呂栄太郎・山田盛太郎・平野義太郎・大塚金之助の編集で『日本資本主義発達史講座』（岩波書店）の刊行がシリーズで始まり、翌年8月に完結しました。全7巻でしたね。

刊行のねらいは、日本資本主義の生成・発達を政治・経済のみならず、文化・思想を含めて分析し、日本資本主義の構造や特質を明らかにしようとしたものでした。

もう一つ、講座の企画に日本革命の道筋を付けようというねらいが込められていました。これは野呂栄太郎の意図でもあった。要するに日本共産党の綱領的文書だった三・二テーゼの肉付けです。

「発達史講座」の第1巻は32年テーゼの発表と同じ日に発売されていますね。これはたぶん偶然だったでしょう。けれども「発達史講座」は27年テーゼ以来の日本の状況を分析し、3・15事件や4・16事件を踏まえて発行を企画したもので、32年テーゼの作成と深く関連するものでした。

—— 10年ほど前（1982年）に岩波書店が復刻版を出していますね。

山崎 ええ。私は旧版のバックナンバーを揃えて持っていたのですけれども、戦争中に友人に貸して無くされた。大事な本は決して人に貸すものでない。それで「発達史講座」の復刻版が出たというのでセットで買いました。「発達史講座」は私の青春時代を刻印する本なのです。私は産労でほんの少し「発達史講座」の編集を補助的に手伝いました。

このシリーズを企画し、執筆者を選んじ、各執筆者に論文のポイントや留意点を与えたのは

野呂栄太郎です。「発達史講座」の編集委員として、著名な「三太郎」や大塚金之助が名を連ねていますが、やはり野呂の存在が大きい。野呂あっての企画でありました。

ところで野呂栄太郎の片腕として、刊行に向けて準備を整えたのは今野良蔵さんです。今野さんは、野呂が人選した執筆者との連絡や、岩波書店との交渉、また印刷や製本会社との交渉の一切を仕切っていました。

これは余談です。今野良蔵さんは「発達史講座」の刊行中か、終わってすぐかにかに検挙され、4、5年ほどつとめて釈放された。私らかつての書記連中は、今野さんを励ますような会をもちました。私より若い大曲直（おおまがり・ただし）も参加した。直が今野さんを冷やかすのですよ。

—— 何を？

山崎 大曲直が「発達史講座」を例に「今野さん、あの講座はまとめて持つと重いですね。けれどもあの『講座』を読んで、よし明日から闘おうと決意する労働者が果たしているだろうか」と言うのですね。

—— きついですね。

山崎 ええ。大曲は強烈な皮肉屋で、ものを斜めから見人だった。思考も冷めていた。大曲は今野さんに「毛沢東の演説集や講話を読むと、誰もがよし明日からこういう方法で闘おうと決意すると思う。けれども発達史講座は難解で、また我が陣営で高い評価を得ても闘いの薬とはなりませんね。今野さんの苦労は報われないですね」と冷やかすのですよ。今野さんは両手で頭を抱えていた（笑）。

—— 今野良蔵さんは日中戦争期に、小林杜人や浅野晃らと帝国更新会思想部を立ち上げていますね。

山崎 詳しくは知らない。私は現在、今野さんとは接触がなく健在かどうか知らない。と

にかくあの「発達史講座」が無事刊行できたのは今野さんの奮闘があったからですよ。けれども今野さんに関しては、岩波書店の復刻版の解題では紹介していませんでしたね。残念に思いますね。

3 全協・日本出版のオルグ

米原昶について

山崎 米原昶は第一高等学校の社研にあって、有賀新も、佐藤大四郎もそうでしたが、肝が据わっているというのかどこか大人びていて、実際にどっしりと構えていた。米原は柔道部の主将をつとめ、佐藤はボート部で鳴らして大変人気があった。

米原が亡くなったあと『回想の米原昶』（刊行委員会編、1982年、非売品）が届きました。米原は73歳で亡くなった。

『回想の米原昶』に、嬉野満州雄が追悼文を寄せていますね。嬉野も社研のメンバーでした。彼も安達先輩と同じ「ベルリン組」で、終戦直前に帰国して読売新聞に入り、間もなく論説委員となっていますね。

本日は米原のことを話して供養したいと思います。米原は柔道部の猛者でしたが、繊細で、言葉づかいも丁寧で、あの体格でとても想像できないがロマンチストでもあった。米原は3年生のとき社研の責任者をやっていた。執行委員代表という肩書だったと思う。彼は外部関係のほうでは、解放運動犠牲者救援会や戦争反対同盟の活動に参加し、3・15事件や4・16事件の犠牲者の救援を有賀新と手伝っていた。

1928（昭和3）年6月、政府は緊急勅令で治安維持法を改悪しました。外郭団体のメンバーや同調者に対しても「目的遂行ノ為ニスル行為」として罰則が強化された。米原は放校処分を受けた後、3・15事件の犠牲者で身寄りのない人

の看護を買って出て、親戚が住む北海道まで付き添い、自らも身を隠す必要があって1年半も小樽市の鉄工所に勤めながらその人の看護をした。

このことは米原の『私のあゆんだ道』（東京民報社、1968年）や、先の『回想の米原昶』に紹介されていないが、エピソードとして紹介します。米原は1932年の暮れに東京に戻ってきます。だから翌年1933年の夏のことです。米原の親父が突然、牛込榎町の私の自宅にやって来て「息子はどこにいますか。連絡をとりたいが」と言うのですね。

米原の親父は米原章三といって貴族院議員だった。『米原章三傳』（松尾尊允監修、刊行会編、1978年）に書かれていますが、米原家は鳥取一の大地主で、山林もあり、鳥取銀行や日本海新聞社などいくつもの会社を経営し、多額納税者として貴族院議員に推挙された。米原の親父は熱心なキリスト者だったとも聞く。だから米原は左翼へ傾斜する蓋然性がなかった。こうして、左ウチワで暮らすことができますもの。

—— そうですね。

山崎 米原の親父が家に突然来たので、私はもちろん、用件があって来宅していた江森盛彌と新島繁もびっくり仰天した。私は1933年の6月の時点で産労をやめて、全協・日本出版のオルグに転身していた。

「息子はどこにいますか」と聞かれても、居場所を教えたらまずいので、私は「近く連絡を取ることになっています」と丁寧に答えた。米原の親父は左翼にかおれた息子を説教するために来たというより、とにかく息子昶に会いたい一心で来た感じだった。私は親父が来たことをすぐ米原に伝えた。

—— 米原さんは何と？

山崎 「うーん」と言ったきり黙っていた。われわれは米原の親父の突然の来訪に驚き、も

しかしたら特高刑事と一緒に来たのではないかと極度に緊張したのです。実際はそうでなかった。私らとしては米原の親父に一刻も早く引き上げてもらいたかった。

ところが米原の親父は帰る気配がなく、どっかと座り込んで「みなさん、天皇制だけは何とか守ってもらえんか」と言うのですね。江森盛彌がそばで米原の親父に「そうはいきませんね」（笑）と、天皇制を潰さなくちゃいかんみたいな話をしていた。

安達鶴太郎にしろ米原昶にしろ、あるいは佐藤大四郎も大島慶一郎も幼少より中等学校まで何不自由ない生活だった。もう現在は使われない言葉だがブルジョワの連中であつた。ところが第一高等学校に入って寮生活をしているうちにある日突然、社会正義に目覚めて一気に左翼転換をしてしまう。そこに何があるのだろうか。昭和恐慌期という時代がなしたもののなのか。

—— 米原昶氏がロマンチストというのは、どういう点においてですか。

山崎 言うのを忘れていました。革命的ロマンチズムというのは、当時米原だけでなく社研のメンバーの誰もが抱いたと思いますね。シャボワロフ著（高山洋吉訳）『マルクス主義への道——ロシアの革命的労働者の手記』（世界文化社、1953年）という本があります。ロシア革命に参加して逮捕され、シベリアに流刑となった労働者の革命への思いを描いたものでした。

とても印象的なのは、ロシアの上空を飛ぶ鷲ははるか先を見通すことができる。われわれが取り組む革命の事業は長期に及びかつ苦難であるが、大鷲に導かれて革命の事業を成功させたい。われわれはこの先つくられるだろう新社会の土台のレンガの一つにでもなればよい、といったストーリーです。

こういうテーマで書かれた作品や演説は『スターリン全集』や『ブハーリン全集』にもあり

ますね。米原はこうした革命文学を好んで読み、革命展望や人生を熱く語っていた。米原は情熱の人であり、ロマンチストだった。

全協・日本出版労組のオルグ

山崎 私は1933（昭和8）年6月に全協（日本労働組合全国協議会）のオルグとなりました。私がなぜオルグとなったのか、誰が推薦したのか、どの機関に在ったのか、これらのことに関しては話したくない。

—— わかりました。

山崎 有賀新も北海道から戻ってきて、私と一緒にオルグとなり、全協・日本出版労組の東京支部に張り付きました。私に与えられた任務は、極端に弱体化し指導も混乱していた東京支部の再建を果たすことにありました。

当時、全協は相次ぐ弾圧で組織実態を失っていた。全協に共産党中央の極左路線が持ち込まれ、かつて全協の委員長だった佐藤秀一が解任され、出身の日本出版労組からも除名されるなど、全協・日本出版は混乱していた。私がオルグとなって任務に就いたときも、組合員は職場における地道な待遇改善より街頭的な活動に傾いていた。

このほか、全協の指導部と日本出版労組との対立もあり、東京支部は正常な組織運営や指導ができないでいた。日本出版労組は事実上、東京支部が担っていたので組織の再建・正常化は、全協中央部の再建の第一歩として重視されていた。東京支部はそれだけ重要支部だったので、オルグとしてもう一人、東京帝大を出たある人が加わりました。

—— どなたです？

山崎 名前を言うわけにはいかない。言うならば本人から事前に了解をとっているか、誰かがすでに紹介し、歴史上の人物ないしは研究上の対象となっていなければならない。

杉浦正男氏の著書

山崎 ところで、オルグとしての私や有賀については、杉浦正男氏によって了解なしに名前を明かされてしまった。だいぶ前に杉浦正男氏が『戦時中印刷労働者の闘いの記録——出版工クラブ』（自費出版、1964年）を出版され、その中で私を「山崎宗一」と特定して紹介しています（51頁）。私は「早市」であって「宗一」ではない。

また杉浦氏は、出版工クラブのかつてのメンバーだった関口正博氏の証言として、彼に「私は当時西さん＝戦後評論社長で有賀氏＝とか山崎さんとかいう人たち＝あとで黨員であることがわかりました＝の指導を受けて人民戦線戦術を勉強していたものでした」（35頁）と言わせていますね。

「評論社長で有賀氏」とは民主評論社の社長で、のち大月書店の社長に転身する有賀新のことですね。有賀の場合に関してですが、苗字はもちろんだが別名まで明かす必要があるのだろうか。

杉浦氏の自費出版本は、戦時体制下における印刷出版労働者の闘いを記録したものとして、貴重な文献であり、事実、研究者をはじめ多くの人に配布され読まれたようです。私はある人を介して入手しました。

杉浦氏の自費出版本に、適切でない記述が何か所もあります。また私は出版工クラブを率先して設立した柴田隆一郎氏や白石光雄氏らをオルグ指導していました。私や有賀新の名前を出すなら、また出版工クラブをテーマにした本であるならば、きちんとした形で出してほしかった。出版工クラブは柴田、白石両氏のアイデアで結成されたのではないのです。

私は杉浦氏の著書に関して、ある人を通じて苦言を呈しました。その結果だと思うが杉浦氏はのちに改訂版『若者は嵐にまけない——戦時

下印刷出版労働者の抵抗』（学習の友社、1981年）を出版していますね。私はこの改訂版も読みました。この改訂版においても、私の名前をこんどは「Y」なる人物として紹介しています。侮辱を受けた感じですか。

繰り返しますが杉浦氏の2冊の本に問題があります。私自身のオルグ指導の評価に関係しますので、この機会を利用して訂正と補足説明しておきたい。

—— どうぞ。

全協の衰減要因

山崎 出版エクラブの問題に言及する前に、まず1932、3年の時代状況について話します。

當時を顧みて、満州事変後の1932、3年は日本労働運動の転換期だったと思いますね。5・15事件をきっかけに軍部ファッショ勢力が台頭し、日本の社会運動は著しく右傾化し、戦時体制へ組み込まれていった。実際、日本労働倶楽部や日本産業倶楽部など「日本主義」を旗幟にした組合が結成され、国家社会主義を標榜するファッショ組合も誕生した。

他方で、特高の取り締まりがいちだんと強化された。左翼陣営の最前線にあった全協は、相次ぐ弾圧や官憲の分裂工作を受けて、1933年の12月の時点で事実上衰滅していましたね。この点はオルグだった私の体験にもとづく見方ですが、事実そうだったと思います。

全協の壊滅ないし崩壊の理由として、第一に、官憲の弾圧をあげなければならない。けれども全協は自壊したのです。中央の間違った指導で組織の弱体化を招き、労働運動における指導力や影響力を失っていったのですよ。

1932、3年ころにおける全協の闘争は、プロフィンテルンの勧告がなされてもなお街頭的で、それゆえに孤立・分散的だった。私は、全協中央が自己批判を試みたのちにオルグとなっ

たが、自分は一切関係ないということでは済まされず、当時を思うと大変悩ましい。

—— 「自壊」とは、どういうことですか？

山崎 組織に内在する矛盾や、リーダーの指導の過ちによって自らが崩れ消滅することですよ。まず大きな問題として、運動方針や組織運営のあり方に関する全協中央と日本共産党との対立がありました。対立は基本的に共産党における間違っただ指導で起きたもので、全協に第一義的に起因しているわけではない。これが問題の根源です。

他方で、全協中央に対する日本共産党の介入や強要は、組織内部に対立を生み、佐藤秀一や内野壮児、神山茂夫らの刷同（全協刷新同盟）を生み、全協は分派闘争のような形で内部分裂を起こした。

この組織内の対立・分裂は、先立つ1930年8月にプロフィンテルン第5回大会において日本問題に関する決議で一応ピリオドを打ったはずですが、尾を引いていて、必ずしも労働運動の現場において適切に軌道修正されていたわけではない。

2週間ほど前、内野壮児夫人の薫子さんから内野の遺稿集『全協刷新同盟の問題——内野壮児追悼集』（労働運動研究所編、私家本非売品、1991年4月）が届きました。没後10年目にして、生前に内野が執筆した原稿や友人・縁者の追悼文をまとめたものだった。内野は10年前（1980年12月26日）に亡くなった。享年72歳だった。

内野壮児は第一高等学校では私より2年先輩で、社研のメンバーでもありました。内野は安達鶴太郎とも親しく、2人は東京帝大新人会が運営していた柳島セツルメントの活動で活躍していた。内野は中等学校を4年で卒業して高等学校に入学した秀才だった。そういえば伊藤律も「中卒4年組」だった。

実は私が全協・日本出版のオルグをしていた

とき、内野先輩も、私より先に全協・日本金属労組の北部地区担当のオルグとなっていた。彼とは年月を特定できないけれども、全協の関東協議会や、支部の連絡協議会がもたれたとき先立って会っていました。

内野壮児が、全協の内部対立や解消にどれほど苦悩していたかは、この本（前掲書『全協刷新同盟の問題——内野壮児追悼集』）を読めばわかります。内野先輩は全協運動における問題点について冷静に回顧・分析していますね。

オルグ指導

山崎 有賀と私に与えられた任務は、満州事変以来つづく弾圧で弱体化した日本出版労組を再建することにあります。全協はその際、全協に直接に加盟する各地方の産業別労組を、単一の産業別全国組合として再編成することを指示していた。日本出版労組も、全日本印刷出版労働組合として再建することとなった。

—— 改組のねらいはどのへんにありましたか。

山崎 組合として、あるいは単産として自主性を確保することにあつたと思いますね。全協の旗でも、組合として自主性を確保することを重視したのだろう。産業ごとに課題が違うし、組織事情も違う。労働者の利益を考えた場合、産業別単一の全国組織の結成は理にかなっていない、共産党との関係を見直して組合の独自性を確保するためにも正しい措置だと思いました。

—— 全協刷新同盟の組織論と似ていますね。

山崎 そうですね。労働組合の組織論としては自主性と独自性を貫くことが再建の建前となっていた。刷同もこんな構想を抱いていましたね。

全協・日本出版労組は、1934（昭和9）年4月、全日本印刷出版労働組合の名称で本部の再建を果たしました。この組織再建のあり方や取

り組みに関しては機関紙『出版労働者』や、全協の『労働新聞』においても紹介されていると思いますので調べてみてください。

—— わかりました。

山崎 ところが本部の再建を果たしたと思っていた矢先、1934年8月と9月に本部、支部、分会の幹部が一斉に検挙され、組織は壊滅してしまった。私は検挙をまぬかれた。有賀もまぬかれたが、彼は間もなく咯血して茅ヶ崎市の南湖院というサナトリウムに入った。

渡部徹著『日本労働組合運動史——日本労働組合全国協議会を中心にして』（青木書店、1954年）によれば、1934年11月20日に、検挙をまぬかれたメンバーによって「出版再建委員会」が組織されたとあります。

けれども1934年という年は、運動方針や情勢分析をめぐって、全協本部と各産別の対立、各産別間の対立、日本共産党と全協本部との対立が顕在化した年だった。野呂栄太郎が前年11月に検挙されて以来、組織対立は引きも切らずに起こっていた。

—— 日本共産党において「多数派」も結成されていますが。

山崎 そうです。まさに末期的な現象だった。

「君主制廃止」の綱領

山崎 1932年9月16日、全協は「君主制廃止」の綱領を採択しました。日本共産党が全協の綱領を32年テーゼに合わせようと、フラクションを通じて指導・工作して採択を強要したものであった。全協の内部対立や動揺はこれ以降、激しくなっていた。

私がオルグとなったとき、私自身も組合員も「君主制廃止」という新綱領にどう対応するかで大変悩みました。私が大日本印刷の労働者の要求闘争を指導していた現場にも、全協本部から佐藤某（佐藤秀一ではない）がやってきてい

きなり「天皇制政府打倒」をぶった。

日本出版労組——全日本印刷出版労組の組合員に、中央の指導により街頭的な行動を主張し、実際に跳ね上がった活動をする例もありました。全協・日本出版の分会中、警察を挑発するようなピラを撒く例もあった。

全協における「君主制廃止」という新綱領は、のちに発表されるコミンテルンが発表した人民戦線の戦略・戦術の適用を考えたときに大きな障碍になっていますね。

「君主制廃止」綱領は、現場の労働者にとって緊急かつ重要なテーマでは決してなく、むしろ組織対立を促す要素となった。私は「君主制廃止」の綱領に関してはこれを無視し、職場の衛生、長時間労働、請負単価のアップ、休憩時間の確保、また全協・日本金属から始まった「氷水寄せ闘争」など、職場の問題を重視した指導に努めました。

出版工クラブの指導

山崎 2・26事件の前年、1935（昭和10）年は、全日本印刷出版労組が壊滅した年と記録されています。これ以降はどの産業部門でも、当局の取り締まりが厳しくなり争議は激減しました。印刷出版関係ではこの年2月に、東京印刷が賃上げを要求した20名余を解雇し、これに反対する争議が起きました。敗北したけれども、たぶん東京印刷争議が印刷出版部門において最後の争議だったと思いますね。

問題は、労働組合が存続できなくなったとき、これに代わる組織をどう結成して自らの生活を守るかということです。労働組合はリアルに時代動向に合わせなければならぬ。突っ張っても犠牲が大きくなるだけです。1935年以降は労働組合に代わる組織を結成して、情勢・状況が好転したときにこれを労働組合に転換する、そうした展望をもって態勢の建て直しをはかるべ

きだ。これが出版工クラブの出発点、いわば出版工クラブ運動の原点なのです。

ところが先に紹介した杉浦正男氏の『戦時中印刷労働者の闘いの記録——出版工クラブ』は、クラブが、柴田隆一郎と白石光雄によって構想され、親睦・相互扶助組織としてのみ設立された、というニュアンスで書いています。

—— 違うのですか。

山崎 違うのです。出版工クラブはひとまず親睦組織として結成するが、労働組合への志向性を内在した組織だった。私はこの点を強く柴田隆一郎氏に提案した。

オルグは表には出ない。杉浦氏は出版工クラブの設立について、柴田のオリジナルな構想と思っただのかもしれないが、これは、私と有賀が柴田・白石両氏に指導して始まった運動でした。

出版工クラブ設立のヒント

山崎 出版工クラブの設立のヒントは、産労の『インタナショナル』の記事から得ました。前述しましたが、私は産労で『インタナショナル』の編集、おもに転載する外国記事の選択と翻訳をしていた。

当時、ポーランドは独裁国家で、ピウスーツキという独裁者が強権支配をしていた。ところが首都ワルシャワで労働者がゼネストを打ったのです。労働組合がなかった国にどうしてゼネストが打てたのか、私は関心をもって記事を読みかつ調べた。

私はなるほどと思った。ポーランドの労働者は企業や地域ごとに衛生思想普及の団体、就職案内・斡旋の団体、栄養指導の団体、糸や石鹼など物資購入の団体、物資交換のバザーとか、労働組合の福利厚生と似た機能をもつ連帯の絆をもっていたのですね。

要するに労働者の連帯の絆は、労働者が組合

を結成して争議を闘う中でしか確保できないのではなく、労働者が集い、日常の生活を基盤にした身の回り相談的な取り組みを重ねるなかで、労働者は階級として闘う本能なりが生まれるのではないかと考えたのです。私は柴田隆一郎と白石光雄の両氏に、このことを力説しました。

——早速『インタナショナル』の記事を調べてみます。何年ころの記事でしょうか。

山崎 1932、3年ころの記事です。

「親睦会か労働組合か」

山崎 杉浦正男氏も先の『戦時中印刷労働者の闘いの記録——出版工クラブ』で紹介していますが、出版工クラブ内で、クラブを親睦会として維持すべきか、労働組合に転化すべきかをめぐって組織を二分する論争がありました。1937年のことです。

この論争は、人民戦線を日本においてどう結成するかという問題と関係していました。1935年7月、コミンテルンが第7回大会で人民戦線の結成を提案し、翌36年にフランスやスペインで人民戦線が結成された。

ヨーロッパの人民戦線は労働組合が主体です。けれども日本の労働組合は日本主義や国家社会主義系の組合が主流となっていて、右派の総同盟（全総）を含めて人民戦線に対しては排

撃的だった。人民戦線をめざす労働組合をどう結集するのか——これが重要な問題として浮上していた。

有賀は慎重だったが、私は、出版工クラブを労働組合に転化すべきだと主張した。私は当時、出版工クラブの神田支部の支部長でしたが、支部の大半が私の説に賛成した。私の考えは、労農無産協議会が結成され、また全評（日本労働組合全国評議会）が合法左翼の結集を呼びかけているもとの、人民戦線結成のため労働組合へと転化すべき時期と判断したのです。

けれども柴田・白石両氏ら本部側は、出版工クラブを労働組合に転化することは非常に危険であり、組織レベルとしては低いかもしれないが、当局の監視や弾圧がつづく中ではなお親睦団体として維持すべきだ、山崎の路線は危険過ぎると反対された。

——それで？

山崎 私ら労働組合への転換派は、出版工クラブを脱会することにした。そして全評が進めていた東京市印刷工擁護連盟という緩やかな労働組合を結成して、のちこれを全日本出版労働者協会に改組した。高津正道が会長に、私が書記長に就任した。ところがその年1937年12月15日に人民戦線事件が起きて、私は検挙された。果たして私の判断が正しかったのか現在も悩むところがあります。（つづく）